

山 中 報

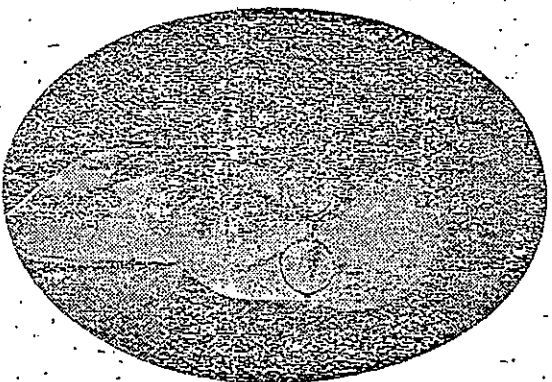
昭和十三年七月二十日創刊
昭和十三年七月二十日創刊
昭和十三年七月二十日創刊
昭和十三年七月二十日創刊
昭和十三年七月二十日創刊

終 刊 の 辭

校長 田 中 巖

昭和十三年十二月創刊以來七年の長きに亘り、回を重ねる事五拾七回、幾多の業績をのこして来た校報もつひに本號限り廢刊する事となつた。想へば本校訓育教授の標識として、父兄同窓生各位との聯絡機關として校報の果して來た任務は決して輕いものではなかつた。僅か四頁大の月刊印刷物ではあるがその中にいづも山中精神が思ひついでゐた。一千の父兄はこれによつて山中のめざす方向を窺ひ得て、子弟の教育

にその指標を得、若き卒業生は、ともすれば矢ひ勝なる心の突も校報によつて覺醒させられる山中魂の消則宏闊な息吹きに自ら奮起し、直接山中に學ぶ生徒、山中に教職にたゞさばる職員も、校報によつて反省と希望とを持ちこづいて來た。願れば五十七號、一枚一枚が山中最近の歴史であり、山中教育の集積であり、山中の息吹であつた。今これが廢刊を見るのは吾が子に別れるやうな感がしないでもない。殊に卒業生諸君の母校への唯一のつながりがぶつり切れる事は何といつてもつらい事である。



しかし皇國の現實は我々にもつゝ(きびしい自制を要求してゐるのである。米英の總反撃は侮るべからざるものがおる。我々は自分たちを小さい便宜を一切かなぐりすて、一燈戦力の増強に馳参すべきである。山中の進展は、皇國の大きい流の中に溶けこんでいゝ等である。我々のやること一つでも皇國の歩みに支障を來すものであつてはいけない。山中校報の使用する用紙などは僅かなものだといふ如き考へ方は非常に強い個人主義である。

折も折、當局からの發想もあつてこの廢刊が山中自體に内在する原因によつたものでない事は校報の最後をさほどかじめにしてはゐないと思ふ。校報は廢刊になつても本校の教育方針はもとより變らざる筈でない。その爲に精彩を欠くだらうなどと考へることは本來顛倒である。又卒業生や父兄との聯絡も、もつと現實的な生々しいもので手を握りあつてゐる今日、一校報の廢刊がそれ程の創にならうとも思はれない、我々は唯本紙の過去に於ける功勞を稱ひつゝ、茲に潔く別離を告げなくてはなるまい。

七月末からは上級生の近年動員も亦る揆定であり、學校自體も頗る多忙を極め、從來の考へ力では消化しきれなくなつて來た、何か荒々しい呼吹と異常に脈搏をせつないまでに身近く飛ずる。しかも皇國の隆衰がこの一瞬にかけられてゐる事を思ふと、思はず拳を握られてゐる事を得ない。我々は今や、校報がなして來た従来の例以上の例をもつて、山中にながらるものの大きな統一を無言の中にしとけて、この戦を戦はねばならない。今廢刊するに當り、感無量である。茲にその功勞の大なるものを回想して終刊の辭とする。

宿泊勤務奉仕作業感想

(二年)

生

雲

徳富

叙

四泊五日の勤務作業。何だか急に我々二年生も戦闘配置に着いたやうで胸の高鳴るのを禁じ得ない。作業地は阿武郡生雲村だ。山口線三谷驛にて下車約十分トラックに揺られて目的地に着いた。

こゝまで来るとあたりはすつかり田園風景に包まれ、熾烈な戦下ともおぼやめぬのびやかな景色である。しかし一度願て考へる時、いやこの静かな田園があれはこそこの聖戦が続けられるのだし、我々の此處に運ばれた事もこの腹に勝ち抜き、少しでも皇國の奉役に立つべく食糧増産の一員として配置されたのだと考へる時、これからの作業はまことに有意義、且楽しいものに感じられた。

五日間の作業はさして困難なものではなくた。稲田の除草のみであつた。除草器を押して田圃の中を行きつ戻りつ小さい水草などを取るのである。まればぬき、時にはぬかるみに足を取られ横柄しやうになることもあり。

苗をいためてはならぬと云ふ心遣ひなほど相常疲れを覺えた。毎日行く農家は異つて居り、其の家々によつて人々の感じも又異つて居る。我々の奉仕を非常に感服して、或は勞はり或は親切に指導してくれる所もあり、又奉仕作業は當り前のことであるから出来るだけ多く働いてもらはねば損だといつた様な口吻をもらす所もあつた。前者のやうな家では出来るだけ澤山仕事をし

てあげたいと思ひ、後者のやうな所で折角一生懸命働いたことも甲斐ないやうに思へた。しかし我々としてはいづれの地にても精一ぱいやつたつもりだ。

夜の宿舎は又格別に楽しいものであつた。一日の疲れを抱いて歸ると村の方々の心盡しの夕飯が待つて居り、一風呂浴びて一同あてがはれた裁縫室に集まると、あちらからも、こちらからも晝の作業の話、あるいは懇應を受けたり喜びの話など、とどどりに語られ、其の内先生もお見えになつて遂に怪談となり、夏夜の更けるのも忘れて皆笑ひ興じた。

(三)

しかし、私は多くの不安を抱いてゐた。それは此の様な山間、不便ではあるし、學校に合宿するなどと言つても設備などとても充分には出来まいと思つたのである。

あこれこれとする内に、汽車は淋しい小さな、徳佐驛に到着した。村の關係者が迎ひに来ておられた。始業式を終へ青年學校の校長先生の注意等があり、一まつ學校の裁縫室に到着いた。私の一つの不安である、居室と腰具の問題は、此の明るい奇麗に整つた室に入つた瞬間に忽ち消えてしまつた。おそらく此の整つた室の内面を見て、快く感じなかつた者は、殆ど無かつたらう。

いよ／＼最後の作業を終へて歸途にゆく時農業會の方より種々親切な御

配慮を賜はり感謝の外はなかつた。この五日間私は集團生活の樂しさ、勤務の尊さといつたものを楽しみ人味はふことの出来たことを嬉しく思つた。

徳 佐

岡屋 忠利

汽車は海抜高き地帯の平坦地を縫つて、數多の隧道を過ぎ、徳佐へ／＼と急ぎつゝある。

再び私はあの出發の際して、烈々と訓示された校長先生の御言葉を頭に浮かべた。

「さうだ山中健児は總ての點に於て模範となり、身魂の續く限り、頑張り抜くのだ」と……

導かれて、目的の部落に着くと、各家の人々がこれ／＼顔で、親切に迎へて呉れたので、私達の心は一さう嬉しくなり、此の部落で働く樂しさが、一段と増した。

いよ／＼仕事に掛つた時、道具が不足した。その時、小母さんは近所の人と笑ひながら話して、快く除草機を借りて来た。亦各所にモーターが取り付けてあつたが、これらも全部もやつて使用して居ると聞いた。

私はその他いろいろの事を見たり聞いたりして部落の人々の助け合ふ心に強く、感じさせられた。

作業から歸ると、食事一切につけ風呂の制當につけ、すべて温い世話が我々を充分満足させた。非農家の婦人會の人々は朝は三時頃より、夜はおそくまで、忙がしく、我々の食事一切について働いて下さつた。此れは即ち農家と非農家の人々が互に協同して食料増産に邁進する美しい心として私は感心した。

私は一日にして不安どころか、有難い心、感心の心で、一杯になり自然に村の人に頭が下つた。

歸途、此の美しい心持で滿ちた村に毎日を暮し行く村民の、その幸福さをしみ／＼と思つた。そして私は私共の仕事がこの温い村民の人情の萬分の一にもそれはなかつた事を喜び、今度こそ作業に出勤したならば、必ず傳統の頑張り精神を遺憾なく發揮して、働き抜く事を心に深く／＼誓つて止まなかつた。

校報は慶應三年皇政復古の大勅令發せられた十二月九日に創刊號を出した。六年前のことである。維新創業の左馬なき一本の大道が豁然と通じた。一片歌々の草莽護國の志が之である。校報の歩みも自らの一進に勵した。

○ 大詔喚發に肅然たる校庭、師弟共に泣いて誓つた數瞬の後はもはや右顧を顧みず、此怨敵攘はずして何の防長他見ぞ。夷狄の足神州を汚すは眞に元寇以來の毒、此怨敵攘はずして何の防長他見ぞ。交永五年敵襲を前に時宗執權となりしは十八才、北畠顯家陸奥守として東下したるは十六才、嗚呼、共に尊皇攘夷の二道に心魂を盡して千載にその名香し。山中健兒よ、即刻國と命を共にすべし、たゞ宸標を安んじ奉る事の他に考へることのある筈もなし。

○ 校報の長い努力の中に一頁して不變のものは祖國に殉ずる若人の士氣の昂揚であつたといへる。サイパン危し。夷狄の足神州を汚すは眞に元寇以來の毒、此怨敵攘はずして何の防長他見ぞ。交永五年敵襲を前に時宗執權となりしは十八才、北畠顯家陸奥守として東下したるは十六才、嗚呼、共に尊皇攘夷の二道に心魂を盡して千載にその名香し。山中健兒よ、即刻國と命を共にすべし、たゞ宸標を安んじ奉る事の他に考へることのある筈もなし。

○ 卷頭の寫眞一枚に幾夜苦慮を重ねた筆もあれば、科學振興の旗印はよかつた

昭和十九年度第二回模試試験成績
國漢・英語・數學・歴史・物理各 100點
○印 第一回ノ合格者

順位	年	組	氏名	國漢	英語	數學	歴史	物理	物象	總點
1	2	5	田正雄	70	50	100	64	93	87	377
2	3	3	田正浩	49	67	95	62	95	368	368
3	4	3	田正清	56	67	90	85	68	68	346
4	5	2	田正幹	51	46	78	75	100	345	345
5	4	1	田正伊	44	35	100	67	73	325	325
6	4	3	田正伊	50	45	70	76	90	316	316
7	8	4	田正伊	36	50	60	83	70	311	309
8	8	4	田正伊	59	67	58	64	88	306	306
9	10	1	田正伊	43	55	73	70	90	297	297
10	11	4	田正伊	50	67	58	64	88	292	284
11	4	2	田正伊	46	58	35	71	78	276	276
12	3	2	田正伊	39	44	78	62	63	271	271
13	4	1	田正伊	48	68	70	62	62	271	271
14	4	4	田正伊	50	56	60	68	74	271	271
15	4	3	田正伊	48	56	60	68	74	271	271
16	10	1	田正伊	50	56	60	68	74	271	271
17	18	1	田正伊	48	56	60	68	74	271	271
19	20	4	田正伊	48	56	60	68	74	271	271
20	21	5	田正伊	48	56	60	68	74	271	271
21	22	4	田正伊	48	56	60	68	74	271	271
22	23	3	田正伊	48	56	60	68	74	271	271
23	24	2	田正伊	48	56	60	68	74	271	271
24	25	2	田正伊	48	56	60	68	74	271	271
25	26	2	田正伊	48	56	60	68	74	271	271
26	27	2	田正伊	48	56	60	68	74	271	271
27	28	2	田正伊	48	56	60	68	74	271	271
28	29	2	田正伊	48	56	60	68	74	271	271
29	30	2	田正伊	48	56	60	68	74	271	271
30	31	2	田正伊	48	56	60	68	74	271	271
31	32	2	田正伊	48	56	60	68	74	271	271
32	33	2	田正伊	48	56	60	68	74	271	271
33	34	2	田正伊	48	56	60	68	74	271	271
34	35	2	田正伊	48	56	60	68	74	271	271
35	36	2	田正伊	48	56	60	68	74	271	271

言ふべきは言ひ、爲すべきは爲し、校報も使命を終つた。五十周年に立ち秋枝中佐の英魂を迎へたのは偶然ではなない。決然筆を捨て、師弟揃らに祖國を援に向ふ空の極みに、陸々たる日本の榮えに共に生きる山中が再び校報發刊の日を描くことが出来るではないか。

○ 校報の長い努力の中に一頁して不變のもの、それは祖國に殉ずる若人の士氣の昂揚であつたといへる。サイパン危し。夷狄の足神州を汚すは眞に元寇以來の毒、此怨敵攘はずして何の防長他見ぞ。交永五年敵襲を前に時宗執權となりしは十八才、北畠顯家陸奥守として東下したるは十六才、嗚呼、共に尊皇攘夷の二道に心魂を盡して千載にその名香し。山中健兒よ、即刻國と命を共にすべし、たゞ宸標を安んじ奉る事の他に考へることのある筈もなし。

○ 卷頭の寫眞一枚に幾夜苦慮を重ねた筆もあれば、科學振興の旗印はよかつた

言ふべきは言ひ、爲すべきは爲し、校報も使命を終つた。五十周年に立ち秋枝中佐の英魂を迎へたのは偶然ではなない。決然筆を捨て、師弟揃らに祖國を援に向ふ空の極みに、陸々たる日本の榮えに共に生きる山中が再び校報發刊の日を描くことが出来るではないか。

○ 校報の長い努力の中に一頁して不變のもの、それは祖國に殉ずる若人の士氣の昂揚であつたといへる。サイパン危し。夷狄の足神州を汚すは眞に元寇以來の毒、此怨敵攘はずして何の防長他見ぞ。交永五年敵襲を前に時宗執權となりしは十八才、北畠顯家陸奥守として東下したるは十六才、嗚呼、共に尊皇攘夷の二道に心魂を盡して千載にその名香し。山中健兒よ、即刻國と命を共にすべし、たゞ宸標を安んじ奉る事の他に考へることのある筈もなし。

○ 卷頭の寫眞一枚に幾夜苦慮を重ねた筆もあれば、科學振興の旗印はよかつた

編輯部より

加藤寛治氏等相つて總理と初代校長非田孝平氏以下に委はれた熱血と傳統に今も尙奇傑、快男子の教授陣を擁して、意氣天を奮み、學談はロシア語が主で法律經濟教養等に次ぎ、漸、露、中央アジアの各地を目標とする意味で規模實に盛であるといふべきです。

大東盟に雄飛せんとする者は先づ恐ろしき威力を有するロシアと支那を知り、腹を鎮るべく、況や明治維新の先聲に續き世界維新を遂行せんとする防長人、殊にその中核たる山中生が来れば男子の本懐は十分遂げ得ると信じます。命も要らねば金も要らぬ純忠の志士よ必ず来れ。

龍山君は四十八回卒業生、疑問のある點はごんご(質問してくれとことです)廣島鐵道局より表彰

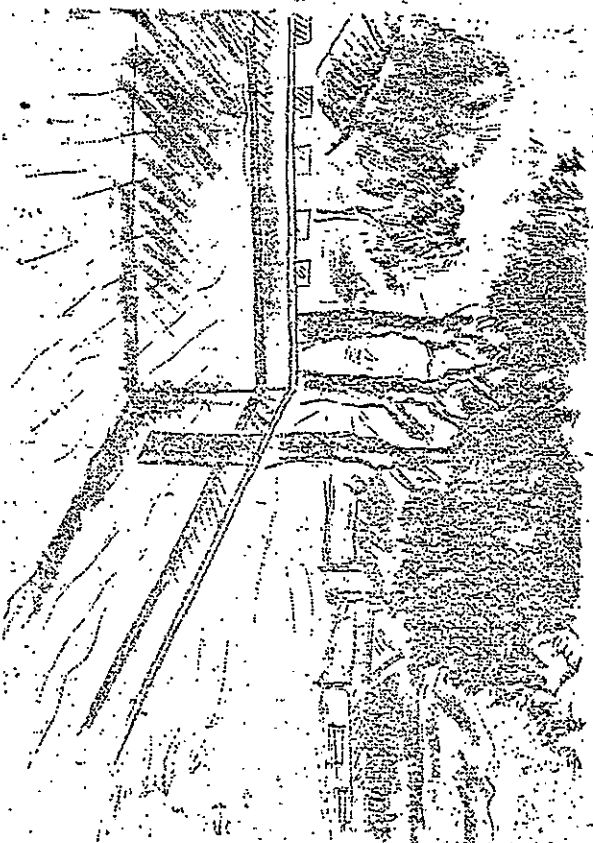
先般廣島鐵道局により行はれた増産増益と熱親和運動には多方面の協力ありて好成績を収めたさうであるが、殊に山中生徒進歩自治會に於ては先集團訓練を強化するに共に、交通道徳勸揚に盡心、大いに功績があつた事を以つて、廣島鐵道局より此程褒形せられた。

五十七回の長きに亘つて出版して来た校報も遂に廢刊することになった。

戦ふ日本として、かうした整理は當然の事である。殊にこゝ、二年は印刷機工の手不足、印刷用インキの低質等によつて、満足なものを早く出すことが出来ず、編輯の苦勞は言語に絶してゐるので、早晚かうなるべきであつたかも知れぬ。さねは她跡の塵は再び倍舊の用紙と寫眞と内装などもつて諸君の御目にかけたいと念願してゐる。

工竣々愈ルニツの望待

—— 學美の飛光二剛速波 ——



昭和十一年以來余山中の夢であつた
 ツルは遂に竣工、いづれ敷地のうち
 に益々機能發揮することになつた。
 正に着手せんとして安事變に際會し
 之より加速度的に加はつた幾多の國內
 事情に、資料は勿論あらゆる事件が根

生みの親本校第十一回卒業生速剛二氏
 今完成にあたり私達はこのツルの
 者側も不撓の努力をつゞけたのであつ
 た。にこそ繼續せられ、先輩も生徒も工事
 詩語に絶する難關の克服がただこの故

の終始難らぬ御理
 解と援助に萬腔の
 感謝を致さねばな
 らない。當初八千
 圓であつた豫算は
 壹萬貳千圓に膨脹
 その間思入ば限り
 なく迷惑をかけた
 ものであつた。

（因みに山崎のツ
 一ルも剛二氏の嚴
 父祐策翁の匿名の
 寄贈にかゝるとい
 ふとでである）次
 に懸條件と終始職
 つて下さつた縣營
 總課及び村瀬組の
 御努力にも謝意を
 表さねばならな

本的な再考と制約を餘儀なく難産に
 つゞ難産をつゞけたのはまだ已むを得
 ない次第であつた。しかしこの時、こ
 の重大決戦の時なるが故に、水泳場一
 つを大山中が缺くことはその儘、大な
 る戦力の缺陥であるともいへる。此に

吉武先生 名譽の應召

潛突と體操の指導に熱烈な張りをも
 以て當られた吉武先生、劍術と
 いへば忽ち先生を思ひ出す原朝潤
 達の重外先生が共に名譽の召集令
 状を受けられ勇躍出發になつ
 た。武選長欠をお祈り申上げる。

寮國團決算並豫算

費 入 之 部		支 出 之 部	
目	計	目	計
十八年度 實收高 壹拾萬圓	十八年度 實收高 壹拾萬圓	十八年度 執行額 十九年度 算	十八年度 執行額 十九年度 算
會 費 陸拾萬圓	入 會 費 陸拾萬圓	總務部 陸拾萬圓	總務部 陸拾萬圓
職員會費 陸萬圓	職員會費 陸萬圓	文 化 部 三萬圓	文 化 部 三萬圓
集團勸募收入 三萬圓	集團勸募收入 三萬圓	雜 收 入 一萬圓	雜 收 入 一萬圓
十八年度 實收高 壹拾萬圓	十八年度 實收高 壹拾萬圓	十八年度 實收高 壹拾萬圓	十八年度 實收高 壹拾萬圓

職員室便り

本下先生 教育召集解除、軍人勸告を以
 て再び武選教育に精進せらる。
 荒川 女史 養護主任として希望が叶ふて
 御着任
 藤田 助手 體操指導 共に後援指導に
 石津 助手 物理教科 常られる指導に

行寮目誌及豫定

五月 三日 秋枝中佐命日 道場に大擲
 員擲擲、武選大會
 六月 三日 森松行軍
 六月 十九日 二五勸募員出動（生榮徳
 作方面、五日間
 本校出身甲飛生徒來校陳談
 六月 三十日 大祓式
 七月 四日 四五年期卒業生
 七月 十二日 滋養體操講習
 七月 三十一日 三年以下期末考査
 七月 一七日 海兵生徒と懇談會
 七月 二十五日 海兵入學試験
 七月 三十一日 三、四、五年父兄會
 七月 二十六日 上級在勤勞動員出動壯行式
 七月 二十七日 同出發
 八月 二日 一、二年父兄會
 七月 二十四日 夏季心身鍛練期間

發送部より

校報が廃刊になりましたので、本年の各
 業生修業生諸君の送付に係割が出来まし
 た。特別の御希望ない限り、これは献金でも
 しがないと存じますからよく御諒承下さ
 います。うけない方又は特に返金を望まれる方は至
 急御一報下さい。
 郵券其他便宜の方法で返金したいと存じ

差引殘額 三、五(特別會計繰入)